

## “学生の自宅学習を促す教育プログラム” から気づいた“授業時間内の学習”

丸尾 雅啓  
環境生態学科

現在私が担当している授業の履修者数は、多いもので 100 名超、少ないものでは 10 名以下になる。その中でも講義・実験・野外実習があり、環境科学部ならではのバリエーションの中、それぞれが受講者にとって貴重な学びの時間になることを期待しつつ、一回一回の授業ごとに、喜び、落ち込み、日々反省しつつも、人数、受講者のもつ雰囲気に対応しようと試み、しかし劇的な改善を見るのがむづかしい（守りに入っている？）のも実情である。その中で、最近の講義・実験等で気づいた「いまどきの受講生」の一面について書きたいと思う。

現在、本学の「教育実践支援室」という組織の取りまとめを担当しているが、この組織が主体的に行っている「学生の自宅学習を促す教育プログラム<sup>1)</sup>」というものがあり、私自身もこれを利用して授業改善を試みている。元々は、「宿題を出そうプロジェクト」として 9 年前に開始されたもので、当時の学生アンケートから明らかになった“自宅で 10 分程度も学習しない大学生”を、机に向かわせるための試みである。当時の教育実践支援室長であった倉茂教授（現教育担当理事）の肝いりで始まった事業では、手始めに環境科学部の教員の講義科目で毎回宿題を課し、まず否応なく授業外学習をさせることの効果をはかることになった。突如受講している複数の科目（多い場合は 3～4 科目）で、毎週宿題を課された受講者達から悲鳴が上がり、当時の学生授業アンケートには急に増えた宿題に対して苦情がつけられていた。学生諸子が机やパソコンに向かう時間が増えたことだけは間違いない。学習内容定着については微妙なところであったように記憶している。

なお、この事業には宿題等を評価するための補助者（教育補助員）として、当該科目を優秀な成績で収めた学生を雇用するための予算措置が取られている。本学にとってこのことは初めての試みであり、私自身もどのように事業が展開してゆくのか手探りであった。幸いにも私の講義科目（受講者約 40 名）を担当してくれた当時環境生態学科 3 年生の学生は、書面を生かしたコミュニケーション能力に長けていた。文献資料調査に基づくレポート課題を評価

するときにまず問題となる資料の丸写し、いわゆるインターネットのコピペなどを上手に見抜く力を身に着け、指摘して私の負荷を見事に軽減してくれた。さらに学生へのコメント・アドバイス、評価とその理由、自身では明確な返答や評価が困難な場合の教員への問いかけ、という 3 種のコメントを、異なる色の付箋紙に書いてレポート上の該当箇所に張り付けたものを提出してくれた。これには驚きであったとともに、大変感心した。この手法を現在まで当該科目担当の補助員に引き継いでもらっている。結果として、学生は宿題に取り組む時間が増え、教員は宿題の体裁、内容について口うるさくコメントする必要がなくなり、教育補助員は他者の評価を行うことによって、自身の振り返り、知識の再確認から成長へと発展することになった。現在に至るまで、当事業を採用希望する教員数、科目数は増え続けている。

ここまでいいとこづくしのように「学生の自宅学習を促す教育プログラム」について述べてきたが、適用に問題があるケースもしばしばである。とくに「宿題を出そう」の場合、受講者によって解答内容が異なる場合はよいが、計算問題などでは受講者の正解が一つになる場合がある。私が担当している受講者 100 名余の理系基礎科目では計算問題を課すことが多いが、まさに正解が一つになる宿題である。この場合多くの受講者は自分で解答することなく、よくできる同級生のものをまるごと転記して平然と（中には講義開始前にこちらに丸見えでも写しているものもある）提出してくる。転記された解答には、必要な内容が漏れている、ひどい時には必要な一行をまるごと飛ばして確認せずに提出する。十何桁もある不思議な答え（一般には化学的計測値でそのような精度を持つ手法は見当たらない）を自分で確認することもなく、しかもそのうち一つ二つの数字を抜かしていても気づかない。あげればきりが無いが、このような宿題を課しても双方にとって時間の浪費となることは請け合いである。20 名程度であれば、おおむね“真の”解答者とその取り巻きを区別するのは困難ではないが、100 名となるとつらい。

そこで昨年度から原点に戻り、講義時間はノートテイクのためだけにあるのではなく、学びの時間であることをあらためて認識してもらうために“たとえ自宅学習の時間が減ることになったとしても”、無為な時間を過ごさずに済むよう演習を多く取り入れるようにした。教員が講義内に教える（自分ではそう信じている）時間を減らすことになるが、一回の講義で本当に必要な内容は果たしてその日に教えるように思っているものの何 % だろうか？ 本当に全部“教員自身が”教えなければならないのだろうか？ と気持ちを切り替えてみた。まだ 15 回のうちの 3 回であり、100 名あまりの解答をその場で見ることになる。修正すべき部分もその場で説明し、直ったものを再度確認する。これを講義の最後の 30 分を利用して行ったところ、すべての受講者の答案を見終わったのは講義終了後 30 分経ったのちであり、時間については見事に“授業崩壊”となった（なお昨年度は本講義には教育補助員を雇用していない）。2 時間目であったこと、カフェテリアが昼休み前半は混雑するために学生から不満の声が上がらなかったことが救いであったが、受講者の皆さんには迷惑をかけたかもしれない。実際、講義終了時には、急ぎのことがある場合には提出して帰ってもよい旨を口頭で伝えておいた。しかし不思議なことに、計算問題を課した 2 回について確認をもらわずに再出した学生は皆無であった。また、修正を求めた学生も必ず修正し、間違いについても理解している様子であった。なかには正解と告げると手を突き上げて歓喜するものもいた。

どうも私は学生の気質、素質を誤解していたように思う。こちらが目を向ければ、引くのではなくこちらを向いてくれるものが実は多く、それを生かす機会をこちらが勝手に逃がしていたのではないかと感じるようになった。また、認められることに思っている以上に達成感を感じてくれるのかもしれない（そういうことに飢えている？）。直接受講者と話したわけではないので思い違い、思い上がりであったなら本文一読ののちに、教員、事務局、学生に関わらずご指導くださると幸いである。ただ、これまでは今以上に勘違いしていたのではないかと感じている。なお、平成 29 年度は演習を増やすとともに宿題も従来通り課し（ただし可能な限り個々に別々の正解が得られるもの）、昼休みを十分にとってもらえるようにと、教育補助員複数名とともに授業に臨

むことになっている。結果については次の機会に記すことになるが、教員・受講生・教育補助員の“三方よし”になってくれれば幸いである。

### 引用文献

- 1) 丸尾雅啓・倉茂好匡 (2017) 学生の自宅学習を促す教育プログラム事業～教育補助員活用の効果～、第 21 回大学教育研究フォーラム講演要旨集